



プレーパークニュース

NO. 1



「みのプレーパーク」見学会を行いました！



- ◆日時 令和元年6月8日(土) 午前10時から正午まで
- ◆場所 岐阜県美濃市曾代88 岐阜県立森林文化アカデミー内
- ◆参加者 5人(市職員4人、市民1人)
- ◆行程
 - 8:30 市役所出発
 - 10:00 プレーパーク会場 現地到着
主催者から施設及び組織概要の説明
 - 10:30 見学
 - 11:30 質疑応答
 - 12:00 終了
 - 13:30 市役所着



プレーパークとは、禁止事項をできるだけ少なくし、「自分の責任で自由に遊ぶ」ことを基本とした子どもの遊び場のこと。



みのプレーパークを案内してくれた人



はぎわらゆうさく
萩原裕作さん(ニックネームは「ナバ」さん) 岐阜県立森林文化アカデミー森林環境教育専攻の准教授。今回、活動についてお話いただき、施設を案内してくれました。

【この他のスタッフ】

- ・ 固定のプレーリーダー2人(何でもできる「仙人」と造形作家の「チコ」ちゃん)(※プレーリーダーについては、次ページQ4参照)
- ・ 週末にスポット参加のプレーリーダー6人程度が登録
- ・ アカデミー教員1~2人
- ・ 学生2~3人



ナバさんの話(要旨)



- * この場を作るのは自分自身。来た人をお客さん扱いしない。一緒にプレーパークを作っていく仲間として扱う。
- * 保険料以外はできるだけお金を徴収したくない。→ 経済格差を持ち込みたくない。
- * 行政の役割は、資金・広報・空間の提供・他部署などへの仲介(つなぐ)役であることが望ましい。あとは、中心となる人物や実行委員会のメンバーに任せ、相談役に徹する。
- * 基本ルール 「人の嫌がることはやめて」
- * 行政は、事業プログラム等のソフトは作らない。
→現場の人に考えてもらうのが大事
- * 「森のようちえん」も一緒に開催
- * 長久手市にある「自然幼稚園」はプレーパークそのもの。プレーパークに興味がある人も多いのでは。



 **Q&A**  (抜粋)

Q 1 「みのプレーパークの会」の設立経緯について教えてください。

(1) 設立時に行政のサポートはありましたか。

A きっかけは、アカデミー学生の卒論課題研究

それを体験し賛同した市民が市役所と掛け合って、翌年度に向けて森林環境税を市町村から申請。木育の一環として始まった。

(2) 行政のサポートは必要ありますか。

A あります。予算だけでなく、活動場所の提供は必要です。

Q 2 利用者数について教えてください。

(1) 1回あたり(およそ)

A 平日 10人程度

週末 150人程度

(2) 年間合計

A こども 1,613人(保護者を含めると 3,000人程度)(平成 30年度)

Q 3 森林文化アカデミーの敷地や施設を使用することになったいきさつを教えてください。

A 県立の施設内であえて実施し、モデル化、普及していくことで「県立の施設の前例」ということで他の市町村でも始めやすくなる。

Q 4 プレーリーダーについて

(1) 子ども達にとってどのような存在ですか。(遊び相手、見守り役など)

A 遊び相手であり、カウンセラーであり、見守り役であり、起爆剤であり、お手本でもあり、見えない柵でもあり…。

(2) 委託していますか。

A 「みのプレーパークの会」が市から補助金をもらい活動

(3) プレーリーダーに資格はありますか。

A ない。しかし資格以上の資質は必要である。

(4) 研修は行っていますか。

A 時折実施。あと年1回の「こどもワーカフォーラム」を実施している。

Q 5 保険金以外にけがした子ども(家族)へのフォローはどうしていますか。

A 応急処置。その後の経過確認の電話でフォローしている。

Q 6 プレーパークで特にこだわっているところがあれば教えてください。

A ルールを作らないようにすること。多様性

Q&A最後に

A 一番大切なのは、「サービスを提供する」のではなく「市民と一緒にみんなと一緒に作っているもの」という感覚。お客様ではなく、仲間であるという意識



↑山の上にある「森のようちえん」

